第1部

地域づくり活動Q＆A

活動の組織づくり・進め方

Q1

活動に参加する仲間を集めるには？

Q2

地域の人々の参加の輪を広げるには？

Q3

活動や組織をスムーズに運営するには？

Q4

普及啓発、ネットワークづくりを行うには？

Q5

活動をステップアップしていくには？

Ｑ１　活動に参加する仲間を集めるには？

Ａ１　参加の場やきっかけをつくる

a1　集中的なイベントで活動や組織を印象づける　…琴似日食倉庫コンカリーニョ
a2　アーティストや建築家の卵に創作の場を提供
…くらくらアートプロジェクト実行委員会
a3　大勢集まる場に出向き、食べ物で人を呼ぶ　…波宜亭倶楽部
a4　キーワードでつないだ仲間づくり　…ＤａＤａ

Ａ２　既存のネットワークを利用する

a5　共に地域の歴史調査したメンバーでグループ設立　…幸まちづくり研究会
a6　地元自治体シンクタンクのネットワークを活用　…小田原やんべぇ倶楽部
a7　県がもっている情報網を活用して複数団体をつなげる…ひょうご中央山麓ネットワーク

Ａ３　人材を発掘し主要メンバーにする

a8　学識者にアタックして主要メンバーにする　…リバイブ名取２１
a9　ＰＲと実践力でサポーターをメンバーに　…（特）みやざき子ども文化センター

Ａ４　新たな人材を育成する

a10　新住民を積極的に巻き込む　…北海道北オホーツクの大自然で学ぶ会
a11　セミナーを開いて人材育成　…（特）さっぽろ村コミュニティ工房
a12　マニュアルをつくらずにイベントを運営　…まちづくりグループ「ｗｉｔｈ　ＡＩＢＥ」

Q１　活動に参加する仲間を集めるには？

Ａ１　参加の場やきっかけをつくる

a1　集中的なイベントで活動や組織を印象づける

琴似日食倉庫コンカリーニョ（北海道札幌市）

⇒地域づくり活動事例63 ／P119

●5ヶ月間に7回のイベントを続々と開催

長年地域で劇場を運営していたが、地域の人にもっと知ってもらおうと、集中的にイベントを開催した。その回数は、5ヶ月間で7回に及ぶ。散発的ではなく次々と連続して開催したことで、地域の人に強い印象を与え、グループの存在を多くの人にアピールできた。

●イベントの達人のコーディネートでユニークな企画を連発

参加型ワークショップなどのイベント手法を熟知するメンバーに、イベントの企画立案をすべてまかせた。まちのマップづくりや、石造りの劇場スペースを活かした劇やワークショップなど、子どもから大人まで誰もが楽しく参加できるイベントは大盛況で、これによって活動に参加する人が増えていった。

a2　アーティストや建築家の卵に創作の場を提供

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

⇒地域づくり活動事例4 ／P55

●建築学科の学生を蔵改修に活用、完成後は若いアーティストの創作の場に

創作活動の場を探している金沢美術工芸大学卒業生の存在を知ったのを機に、空き蔵をアトリエ兼ギャラリーとして改修しアートを織り交ぜる活動が始まった。蔵の改修は、建築学科の地元大学生7人が担当した。学生は、建築家や工務店の職人の協力を得ながら、蔵の基本設計、実施設計そして現場監理まで行う。空き蔵のゴミ出しや清掃などは実行委員会のメンバーが関わっている。大学では体験できない貴重な実践の場となっており、熱心な学生の参加が後をたたない。改修した蔵はアーティストの創作の場となり、そのアーティストたちは自分の得意分野を活かして活動に自然と協力している。

●自由な雰囲気で創作を楽しみながらまちづくりに参加

アートを通じて広がる人の輪や、改修作業に参加する学生と専門家、イベントに訪れる参加者など多様な人が関わっているが、参加のルールや会費などは存在しない。参加したいときにいつでも関われるオープンな雰囲気と、メンバーの活動を楽しむ姿が多くのファンの獲得と仲間集めにつながっている。

a3　大勢集まる場に出向き、食べ物で人を呼ぶ

波宜亭倶楽部（群馬県前橋市）

⇒地域づくり活動事例12 ／ P63

●人が集まるイベントで独自色をＰＲ

県主催の文化行事など多数の来場者が訪れる会場で活動をＰＲした。事前にマスコミに取り上げられると、効果がさらに増大し多くの人の注目を集める。イベントの本番では看板などの設営や販売するオリジナル商品を倶楽部らしくデザインし、お揃いのＴシャツ姿でＰＲした。一つひとつ思いをこめて準備にあたることが、結果的にたくさんの催しの中で来場者の関心を引きつけることにつながる。

●求心力が強い“食べ物”で興味を引く

夏祭りで、萩の花を模した伝統の銘菓「萩の餅」を復活・販売した。奇跡的に残っていたレシピを参考にメンバーがお金を出し合って原材料を仕入れ、限定100セットの販売にも関わらず、販売前から買い求める人の行列ができ、瞬く間に売り切れた。その後のイベントでの販売でも反響は１回目同様に大きく、活動に弾みがついた。美味しいものには関心が高く、人は集まりやすい。

a4　キーワードでつないだ仲間づくり

DaDa（熊本県熊本市）

⇒地域づくり活動事例46 ／ P102

●なにげない“こねる”という技術に着目

「“こねる”という技術をもった人たちが集まったら、何か面白いアイデアが浮かぶのではないか」。建築家が、瓦職人、左官、陶芸家、塩製造業者、化粧品店経営者、料理店経営者、翻訳家、地質学者、土木工学者など、多様な職種の人たちに声を掛け、最初の会合を持った。

●オリジナルの商品開発でネットワークづくり

「お互いに刺激を受け、各自の仕事に広がりをもたらす出会いの場をつくり、小さくてもいいから物の流通を生み出したい。数年後にＤａＤａとしての商品開発を行えれば…」。こんな夢を実現する第一歩として“こねる”技術に関わる職人の仕事現場を訪問する「ねり歩きツアー」を実施。

●ネットワークがメンバーの働く現場にも新しいエネルギーを生み出す

“こねる”ことは、誰でも知っている身近な技術。メンバーは、それが異業者間や地域間のネットワークを生み出す技術でもあることを発見した。具体的なものやことを生み出すにはまだ時間がかかるかもしれないが、こうしたネットワークがメンバーの働く現場にも新しいエネルギーを生み出している。

Ａ２　既存のネットワークを利用する

a5　共に地域の歴史調査したメンバーでグループ設立

幸まちづくり研究会（神奈川県川崎市）

⇒地域づくり活動事例２７／Ｐ８０

●市の成人学級で共に学んだ仲間による提案づくり

この会では、廃止されたＪＲの操車場跡地の活用について、従来の行政主導によらない、地域住民自らが提案する計画づくりを実施した。

市の成人学級「自主企画事業」に「新鶴見操車場の昔と今」をテーマに応募した市民や、そこに参加した市民が地域の歴史や文化、自然環境の変化などを調査した。そうした活動を通して操車場建設で失われた自然環境やコミュニティを回復していこうとの、同じ思いの人々が核となり設立。定例会やシンポジウムを開催しながら、約１年の活動期間で提案書を作成した。すでに成人学級で基礎的な情報は収集しており、効率的に活動を進めることができた。また一緒に学んだ仲間ということもあり、活動の目的や理念を共有することも難しくはなかった。

メンバーの多くは、跡地で川崎市暫定利用事業に参加し、市民主体の維持管理団体に所属。定期的な花壇整備の活動を行いながら、計画づくりを実践した。「現場を知った提案づくりができる」というメンバーの発言に実感がこもる。

a6　地元自治体シンクタンクのネットワークを活用

小田原やんべぇ倶楽部（神奈川県小田原市）

⇒地域づくり活動事例１４／Ｐ６５

●交流館開設を機に、市のシンクタンクが会の発足をプロデュース

「小田原宿なりわい交流館」の開館にあわせて市のシンクタンク（小田原市政策総合研究所）がワークショップ形式の公開研究会「おだわら車座@角吉」を開催した。その話し合いの中で、将来の市民運営を目指しながら「なりわい交流」を具体化していく集まりが提案された。この提案を受けて、シンクタンクがさらに呼びかけて、シンクタンクの研究員と市内で活動するいくつかの市民団体の中核メンバーを中心に活動を始め、平成14年４月、倶楽部として正式発足。

●シンクタンク研究員の人脈が、さらに活動の幅を広げる

小田原市では、ここ10年くらいの間に市民活動団体が自然発生的に立ち上がりはじめていたものの、あまり団体間のつながりはなかった。交流館という場を活用したシンクタンクの呼びかけが、団体やキーパーソンの交流を促した。市のシンクタンクは、市職員、学識経験者・大学院生、市民から構成されており、会の活動には、こうした研究員の人脈も活かされている。例えば、「若者が考える街」というプロジェクトでは、小田原をフィールドに、シンクタンク研究員が在籍する大学の研究室とのコラボレーションによる研究活動が展開されている。

a7　県がもっている情報網を活用して複数団体をつなげる

ひょうご中央山麓ネットワーク（兵庫県播磨・丹波地域）

⇒地域づくり活動事例59 ／P115

●県職員が地域的に共通点のあるまちづくり団体へ、交流を呼びかけた

まちづくり団体を主宰する兵庫県職員が、県中央部の中国山地周辺は県内の他地域と比べてイメージが弱いので、各団体同士の交流を盛んにすることで活性化の起爆剤にしようと考えた。仕事上の関わり、個人的な関わりの区別なく、県がもっている地域づくりの情報網を活かしてまちづくり団体のキーパーソンに集まってもらうことから始めた。最初は、グループの趣旨、目的が違うもの同士であるため、話がかみ合わない部分もあったが、そのうちどこも同じような問題を抱えていることを知り、ある団体のリーダーはむしろほっとしたという。複数団体の連携は、各団体のメンバーがお互いの団体を知るきっかけにもなり、仲間意識を醸成した。元気のない団体は、他の団体がＰＲを行って盛り上げるなど、団体間相互の交流が生まれた。

●気軽に集える工夫でやわらかなネットワークづくり

若い世代が入りやすいようなテーマの設定（例えば「面白いまちづくり、もうかるまちづくり」）、特定の人への負担を避けた会議の開催（ホスト役の持ち回り制）、さらに他団体への連携の声かけなど、気軽に多くの人がネットワークを組めるように工夫している。また各団体が開催するフォーラムにお互いが講師として行き来するなど、個々の交流も地道に進められている。

Ａ３　人材を発掘し主要メンバーにする

a8　学識者にアタックして主要メンバーにする

リバイブ名取２１（宮城県名取市）

⇒地域づくり活動事例４１／Ｐ９４

●これは！と思う人にアタックしてみる

地元商店主（のちコアメンバー）が名取市主催の会議に参加した際、初対面の学識者２名に思い切って声をかけて、学生からまちづくりのアイデアをもらえないかと相談してみた。ちょっとした勇気とひらめきが、その後のコンペ開催、そして団体設立へと結びついていった。

学識者からは快諾を得て、高専と短大の学生を対象とした「まちづくりアイデア模擬コンペ」を実施。全作品の巡回展示の様子がマスコミに取り上げられ、地域住民から大きな反響を得た。学識者の力を借りたイベントが人々の注目を集めたことで、商店主たちの団結力が強まり、自分たちが住むまちに積極的に関わろうという気運が高まった。

●人材を手放さないための活動の継続や役割づくり

その後も学識者からのアイデアを基にしたイベントの実施、拠点開設にともなう学生との協働作業など、継続的に学識者の支援を得る環境を整えた。また、会報発行責任者になってもらうなど、学識者を団体にとってなくてはならない人的資源と捉え、一定の役割を担ってもらいながら活動を進めていった。

a9　ＰＲと実践力でサポーターをメンバーに

特定非営利活動法人　みやざき子ども文化センター（宮崎県宮崎市）

⇒地域づくり活動事例４２／Ｐ９５

●グループをＰＲできる会に出席して、まずは他の参加者と顔なじみに

グループのメンバーが、「市民参画による市政研究会まちづくり提言」などの市が主催する勉強会に積極的に出席し、行政や他のＮＰＯのメンバーとまずは顔なじみになった。そして、自分たちのグループの活動目的や活動分野をＰＲすると同時に、他のＮＰＯの情報も把握するなど人的なアンテナをはりめぐらせていった。

●任意の集まりから事業での連携、そしてメンバーに取り込む

学校の週５日制にともない、子どもたちのために中心市街地で何かできないかと、行政担当者、学識者、ＮＰＯなどが任意で集まり会合を重ねるうちに、商店街（商工会議所）・行政（教育委員会）・ＮＰＯの協働事業「まちんなかプレイパーク事業」の実施へと発展していった。市の担当者や他のＮＰＯメンバーは、この事業を通してグループの高い使命感や、課題を具体化する企画力、行動力などに直に接し、信頼関係が増していき、自らもグループの活動に参加するようになったという。そしてこのグループでは、このように実際の活動を通してグループに魅せられた人材を、例えば役員にしてメンバーの活性化や活動のスキルアップを図るなど、確実にグループで活かしている。

Ａ４　新たな人材を育成する

a10　新住民を積極的に巻き込む

北海道北オホーツクの大自然で学ぶ会（北海道浜頓別町）

⇒地域づくり活動事例５１／Ｐ１０７

●小学校の行事には全家庭が参加

会の活動する豊寒別地区は人口110人ほどの小さな集落で、活動には、地域の人たちのほとんどが参加・協力している。ここでは、小学校の行事には地区の全家庭が参加するという自治会のルールがあり、地元小学校へ山村留学家族としてやってきた新住民も活動に巻き込んで、一丸となった地域づくりを目指している。

●まずは日常のコミュニケーション、そして地域での主体的な役割を

山村留学家族に地域の一員である意識を促すため、会では「困っていることはないですか？」と中心メンバーがまめに声をかけて、できるだけコミュニケーションを取るようにしている。地域活動に対する理解と参加を得るためには、お互いの信頼関係が欠かせない。

信頼関係を築くことができたら、次は自治会の役員をお願いする。新住民も、地域での役割を与えられ、より一層地域づくりの主体者としての自覚が芽生えてくるようになる。

a11　セミナーを開いて人材育成

特定非営利活動法人　さっぽろ村コミュニティ工房（北海道札幌市）

⇒地域づくり活動事例２０／Ｐ７１

●地域の人の中からコミュニティ放送の担い手に育てる

グループのメンバーや一部の人だけでコミュニティ放送の番組をつくるのではなく、地域の人が作り手自身になれるように、一般の人たちを対象として、放送技術や番組づくりを教えるセミナーを頻繁に開催した。一方通行の活動にならないように、積極的に地域の人の参加を促し、一緒に活動できる人を育てている。

Ａ４　新たな人材を育成する

a12　マニュアルをつくらずにイベントを運営

まちづくりグループ「with AIBE」（三重県浜島町）

⇒地域づくり活動事例17 ／P68

●現場対応により、自分で考え行動することの重要性を学ぶ

一般的なイベントの運営はマニュアルをつくり、関係者はそのマニュアルに沿って動くと効率がよい。しかし、このグループが実施した「渚のセッションライブ in びん玉ロード」というコンサートでは、一切のマニュアルを作成せず、準備から当日の運営までをこなした。具体的には、最初の打ち合わせで、現場にあった段ボールの切れ端にマジックで役割とスケジュールを書き、確認したあとは、すべて現場対応となる。

そもそも地域づくりにマニュアルというものは存在しない。そのことをよく知っている中心メンバーは、若手メンバーを育成する方法として、マニュアルのないイベント運営を実施する。ひとりひとりが、どのように行動すればよいかをその場その場で考えていく。こうした経験を通して、自らが考え、行動する地域づくりの重要性を学ぶことができるのである。

Ｑ２　地域の人々の参加の輪を広げるには？

Ａ１　地域住民が気軽に集まれる場所をつくる

a13 歴史的な建物を拠点にする　…（特）さっぽろ村コミュニティ工房
a14 気楽に立ち寄れる喫茶サロンを開設　…くらくらアートプロジェクト実行委員会
a15 地元でのお付き合いを大切に拠点を運営　…大津の町家を考える会
a16 駅の待合室をコミュニティスペースに　…華・花倶楽部

Ａ２　身近なテーマで参加を仕掛ける

a17 ワークショップなど双方向型のフォーラムを開催　…幸まちづくり研究会
a18 周辺住民を巻き込んだ公園づくり　…（特）木と遊ぶ研究所
a19 毎月の歳時記にあわせて参加型イベントを開催　…小田原やんべぇ倶楽部
a20 毎月決まった日に森林ボランティア活動　…つるがしま里山サポートクラブ

Ａ３　地域住民が主体となる活動を企画する

a21 無理をせず、あるがままでもてなす農村民泊　…安心院町グリーンツーリズム研究会
a22 地域の名人による“大っきなお茶飲み会”を開催
…（特）朝日町エコミュージアム協会
a23 地域の一軒一軒がイベントの主催者に　…村上町屋商人会
a24 住民自らが地域の魅力を伝える「語り部」に　…漂探古道

Ａ４　子どもたちが参加する活動を企画する

a25 子どもたちの環境活動が地域ネットワークを生む　…近木っ子会議
a26 子ども主体の活動を大人が応援　…（特）みやざき子ども文化センター

Ａ１　地域住民が気軽に集まれる場所をつくる

a13　歴史的な建物を拠点にする

特定非営利活動法人　さっぽろ村コミュニティ工房（北海道札幌市）

⇒地域づくり活動事例２０／Ｐ７１

●地域の歴史を伝える「たまねぎ倉庫」でコミュニティ放送局を開局

地域に根ざしたコミュニティ放送を開局するために、この地域がたまねぎ栽培発祥の地であることにちなんで、空いていた石造りのたまねぎ倉庫を借り上げ、そこを拠点のひとつとした。また、町の古老や、歴史に詳しい専門家を呼んで、まち歩きやフォーラムを行った。まちの歴史を軸にすることで、町内会など、地域の人とのネットワークを広げることができた。

●スペースや設備の提供で拠点に人を集める

この団体では、地域の市民団体の活動を支援するため、事務所内のスペースの提供や、印刷機、コピー機などの貸し出しも行っている。これにより、いつでも市民や団体が気軽に訪問できるようになり、さらに多様なネットワークづくりにつながった。

a14　気楽に立ち寄れる喫茶サロンを開設

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

⇒地域づくり活動事例４／Ｐ５５

●蔵を改修して“たまり場”づくり

会では、まず町内に残る空き蔵を改修して、住民が気軽に集える“たまり場”をつくった。自分たちが楽しめる場であることを大切にし、また町外の人にも来てもらえるように、ギャラリーの設置、地場産品の展示販売、名物「しょうゆソフトクリーム」の販売を行っている。

●“たまり場”の名称募集で愛着を持ってもらう

改修にかかる費用（1000万円弱）はメンバーがポケットマネーを出し合うこととし、出費をできるかぎり低く抑えるために自分たちの手で改修したことが、かえって愛着を増すことになった。また、住民に親しみを持ってもらえるようにと、蔵のネーミングを町民から公募し、開設当初は町外の人に蔵の心地よい空間を味わってもらうために、毎月１回プロのミュージシャンを呼んで蔵コンサートを開催した。現在は、子どもたちが学校帰りに立ち寄ってカードゲームをしていたり、婦人会などのちょっとした会合や食事会が開かれたりと、地域に根づいている。

a15　地元でのお付き合いを大切に拠点を運営

大津の町家を考える会（滋賀県大津市）

⇒地域づくり活動事例７／Ｐ５８

●活動を地道に続けながら拠点となる空き町家を発見

平成９年の発足以来、会では、シンポジウムや町家見学会の開催、他都市の視察、町家マップの作成、書籍の編集・発行などに取り組んできた。こうした活動を続ける中、平成13年、市内中心部の商店街に空き町家を発見。これまでの活動で築いたネットワークが発見に結びついたのだ。

家主は県内の別の都市で書店を経営。何度も足を運びながら借用の了解を得て、まちづくりの拠点「まちづくり大津百町館」としてオープンさせた。

●町民が利用しやすい「まちづくり大津百町館」の管理

「まちづくり大津百町館」は、休館日の月曜日を除く毎日、会のメンバーがボランティアで常駐し、来館者の案内や館の管理をしている。これは、いつでも気軽に立ち寄って使ってもらえるようにと考えたからだ。館には市民や観光客などの見学者も多いが、個人やグループなどによる展覧会、講演会、文化教室、会合などの会場としてもよく利用されている。町内会にも参加し、地元のお祭りや商店街の行事にも積極的に関わって、周辺の人たちとの日ごろの付き合いを大切にしながら運営にあたっている。

a16　駅の待合室をコミュニティスペースに

華・花倶楽部（北海道浦河町）

⇒地域づくり活動事例２６／Ｐ７９

●駅に花を飾ったことが縁となり、待合室を多目的に利用

１日の乗降客数が約100人という、もの寂しい地元のＪＲ駅に花を飾ったことで駅員との交流が生まれ、駅の待合室を団体の打ち合わせスペースとして使用させてもらえるようになった。公共施設の貸会議室は終了時刻も早く、仕事をもった女性が多く所属するこの団体にとって好都合のスペースだった。その後、待合室にはミニ図書館やまちの掲示板が設置され、駅が町のコミュニティスペースとなっていった。そのきっかけづくりにこの団体が果たした役割は大きい。

●ひとつの出会いが大きな交流の広がりを生む

花を植える活動により駅員との交流が深まり、クリスマス駅コンサートという企画を生んだ。駅前にクリスマスツリーを設置し利用者に飾り付けに参加してもらったり、会員がコンサート会場のデザインや飾り付けを行った。町の音楽教室の協力を得て駅の事務室、待合室を会場に演奏会を開いた。この日ばかりは小さな駅が人でいっぱいになったという。ひとつのイベントをつくりあげたことがメンバー各人の自信につながり、団体のＰＲにも役立った。

Ａ２　身近なテーマで参加を仕掛ける

a17　ワークショップなど双方向型のフォーラムを開催

幸まちづくり研究会（神奈川県川崎市）

⇒地域づくり活動事例２７／Ｐ８０

●ＪＲの操車場跡地利用を地域住民と一緒に検討

会では、ＪＲの操車場跡地の活用提案書を、地域住民と一緒に考えながら作成した。これは「幸ふるさと森づくり」構想と題した、子どもたちが「ふるさと」と思えるような、暮らしていくことが愉しみとなるような土地利用の提案である。作成過程では、ワークショップ・フォーラムを２回開催し、住民の意見がたくさん盛り込まれた。

●一方的な情報発信にならないようにフォーラムの方法を工夫

フォーラム開催以前に、地域の現状と課題、これまでに出された跡地利用についての地域住民の意見をまとめた「地区カルテ」を作成しており、地域住民と問題や課題の共有はある程度図られていた。そこで、第１回フォーラムではワークショップにより、跡地利用に対する地域住民の思いを集約した。ファシリテーター（進行役）はメンバーが務めたが、事前にそのための勉強会と模擬体験を実施した。続く第２回フォーラムでは、第１回の成果を踏まえてメンバーが作成した提案書案を提示し、パネルディスカッションを中心としながらも、会場とのやり取りを積極的に行いながら、提案書案について議論を行った。その結果を盛り込んで、市に提出した。

a18　周辺住民を巻き込んだ公園づくり

特定非営利活動法人　木と遊ぶ研究所（新潟県上越市）

⇒地域づくり活動事例３４／Ｐ８７

●借り手を探していた土地で公園づくりを提案し、関係者と交渉

公園づくりの活動は、メンバーが住んでいる住宅街で、長く使われていなかった土地の所有者が、借り手を探しているという情報を得たことがきっかけ。研究所では、すぐに所有者、行政、町内会に話をして、住民参加型の公園整備の企画案をつくった。関係する主体は何かを調べ、すぐに行動に移し、熱心に交渉したことが参加型の公園整備の実現につながった。

●住民から樹木を募集し、子どもたちも参加して整備を行う

整備にあたっては、まず周辺住民に、自分の庭で生長しすぎた樹木の提供を呼びかけた。これにより、植樹の費用は安くすむ上、公園の整備に住民が無理なく自然に参加し、整備後も公園に愛着が持てる。またこの土地は、以前は駐車場として使われており、地面の一部がコンクリートで覆われていた。撤去するにはかなり費用がかかるため、その状態のまま、そこに子どもたちがペイントするイベントを開催した。不用なコンクリートの地面を、整備のアイデアによって、子どもが参加できる活動に利用することができたのだ。

a19　毎月の歳時記にあわせて参加型イベントを開催

小田原やんべぇ倶楽部（神奈川県小田原市）

⇒地域づくり活動事例14 ／ P65

●地域の人たちの知恵を借りて、昔ながらの歳時記を再現

公民館と観光案内所の機能を持つ施設「小田原宿なりわい交流館」を拠点に、地域の生活文化を再発見し、生業（なりわい）と生活のつながりを再生させようと、定例イベント「なりわい歳時記」を毎月開催。地域のお年寄りや生産者・事業者の人たちの知恵を借りて、毎月の歳時記にあわせ、歳時記のしきたりやさまざまな生活に関わる文化を再現する参加型のイベントを実施して、年齢・職業・男女などの壁を越えた交流を生み出した。

●毎回再発見のあるイベントで盛り上げる

身近なテーマを選びながらも、「ああ、そうだったのか」と、常に新しい何かを発見できる仕掛けを工夫した。例えば１月の「雑煮会」では、旧家のレシピから歯ごたえのある鶏肉や小ぶりで味わいぶかい野菜を探し出し、どこか懐かしい雑煮をよみがえらせた。２月の「節分会」では、豆まきだけでなく、魔除けのやっこがし（焼臭がし）、年越しの蕎麦打ちを再現、７月の「草市」では、盆棚の品を商う草市が交流館の近くで開かれていた故事から地場の旬の品の市を立てたりと、他のイベントでは味わえない体験を用意し、参加者を飽きさせない内容とした。

a20　毎月決まった日に森林ボランティア活動

つるがしま里山サポートクラブ（埼玉県鶴ヶ島市）

⇒地域づくり活動事例39 ／ P92

●第３土曜は地元の里山をきれいにする日

クラブでは、「森林ボランティア」の作業日を、毎月第３土曜日の午前と決めている。毎月同じ日、同じペースの開催は、活動日の定着につながっており、初めて参加する人にとっても「ちょっと行ってみようかな」と思わせる、親しみやすい活動となっている。平成16年度からは第１と第３土曜日の２日を活動日としている。

●森がきれいになって味わう達成感が、次の参加の源

もうひとつ参加しやすい要因は、参加して自分が「行うこと」や「できること」がはっきりしていることである。自然の中で体を動かす作業自体も魅力のひとつであり、半日の作業を終えた後には、森がきれいになっている。自分の力でこれだけきれいにしたという達成感が、次の参加の源になっている。活動を開始して１年と若い団体だが、森林ボランティアを柱として会員数を拡大している。

Ａ３　地域住民が主体となる活動を企画する

a21　無理をせず、あるがままでもてなす農村民泊

安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県安心院町）

⇒地域づくり活動事例５４ ／ Ｐ１１０

●自然体でできる安心院方式の農村民泊で参加家庭を増やす

安心院方式の農村民泊では、受け入れ農家は、子どもの空き部屋などを宿として提供し、夜の語らいも負担にならない程度にする。まかないは、地産の食材を使った朝食だけ。夕食は外食を勧め、移動にはタクシーを使ってもらう。受け入れ農家の労力を軽減するだけでなく、地元に社会的・経済的利益が還元されるように努めている。

●来訪者を迎えることで住民自身が輝き出す

活動推進では、女性や高齢者の知恵が必要とされた。活動に関わる女性たちは、「農家に嫁いで本当に良かった」と素直に思えるようになったという。農村民泊では、来訪者を通して地域への誇りが生まれ、また自分の力が必要とされているという精神的潤いを多くの住民にもたらしている。それと同時に経済的にも潤っている。

a22　地域の名人による“大っきなお茶飲み会”を開催

特定非営利活動法人　朝日町エコミュージアム協会（山形県朝日町）

⇒地域づくり活動事例３１ ／ Ｐ８４

●地域の人にとって身近な話題で惹きつける

地域の人たちを主役として活動に参加してもらうため、「かい餅名人」や「ハット汁名人」など、地域の知恵を持つ名人地図を作成した。「料理名人」など広い範囲の名人となると、「私など…」となかなか出てこないものだが、このようなポイントの名人であれば案外探しやすい。

●食べて楽しみながらコミュニケーションを！集いのネーミングも大切

実際の活動は、里山から採取した地元素材を“使って”“食べて”“保存する”をテーマとし、活動発表の場として、「大っきなお茶飲み会」を開催。地元の名人たちによる調理と集いで「食」も楽しんだ。会のネーミングを「大っきなお茶飲み会」としたことで、みんなが気軽に参加しやすい雰囲気ができた。

a23　地域の一軒一軒がイベントの主催者に

村上町屋商人会（新潟県村上市）

⇒地域づくり活動事例40 ／ P93

●各家庭に伝わる人形を見て歩く「人形さま巡り」を開催

会が初めて「人形さま巡り」への参加協力を呼びかけた時、住民の期待は薄かった。代表者は、一軒一軒歩いてまわることから始め、「町を良くしたい」という思いを一人ひとりに直接語ることで、次第に熱意が伝わっていった。１回目の人形さま巡りが終了してみれば３万人を超える人が訪れ、町屋を見た見学者は口々に「趣があって良いですね」と語った。その反応は、参加協力した住民の喜びと自信につながり、次の参加意識を高めることとなった。

●自分たち自身がイベントの主催者として積極的に関わる

ひな人形の展示に協力している住民は、商店経営者がほとんど。家業の合間に人形を見せるというだけでなく、親切な説明つきで訪れた人をもてなすなど、自分たち自身がイベントの主催者として積極的に関わるようになってきた。そして各家で人形の説明をするお年寄りの活動が話題になった。さらに、直接展示に関わらない住民の中にも道案内を買ってでる人たちが現れるなど、活動が地域の人々の中で広がっている。

a24　住民自らが地域の魅力を伝える「語り部」に

漂探古道（和歌山県中辺路町）

⇒地域づくり活動事例13 ／ P64

●語り部養成講座で地元住民を語り部に

南紀熊野体験博の開催に先立ち県が開催した「語り部養成講座」受講者有志が、地域外からの来訪者と接したことで活気づき、さらにプロ意識をもった語り部を目指して団体を設立。熊野古道の歴史的な意義を住民へ周知するとともに、新たな語り部を養成する目的で、語り部養成講座を開催し、多数の地元住民の参加を実現した。講座では、机上の講義のみならず、実際に熊野古道を散策するなど、地域の魅力を自分のことばで語れるように、各受講者の体験・発見を重要視したカリキュラムを組んだ。

●来訪者との直接の対話が、語り部のやりがいにつながる

来訪者と直に接してその反応を知ることができるのが、語り部の特徴だ。「ありがとう、また来たい」と言われることが、メンバーには何よりのご褒美となる。来訪者が増えるにつれ、その目的も多岐に及ぶ。歴史、スポーツ、自然、癒しなど、多方面から古道を捉えられるようにと、メンバー各人は自分の切り口で地域の魅力を最大限に引き出そうと取り組んでいる。

Ａ４　子どもたちが参加する活動を企画する

a25　子どもたちの環境活動が地域ネットワークを生む

近木っ子会議（大阪府貝塚市）

⇒地域づくり活動事例３２ ／ P８５

●行政マンや地域専門家のネットワークを活かして総合学習プログラムを企画

水質ワースト１となった近木川の環境が問題になり、近木川市民フォーラムで、「近木川を遊べる川にしてほしい」という子どもたちからの提言が行われた。この提言を受けるかたちでグループの活動を開始した。グループは、地元市役所職員や学校の教員など、地域で仕事をしているいろいろなの人々の交流を促してネットワークを築き、地元の小学校の総合学習を企画・支援した。子どもたち自身が遊びを通じて川の再生を考える企画は、当初の予想を越えて、川の粘土、草木を使用した焼物、染物製作などへも発展していった。これらの実体験をもとに、川の昔のことを調べたいという要望が子どもたちから自然に寄せられ、旧住民へのインタビュー実施のきっかけを得た。

●子どもたちが住民へインタビューし、地域のフォーラムで発表

子どもたちの活動を地域の旧集落の住民にも理解してもらうため、子どもたちによる住民インタビュー調査を行い、それをフォーラムで発表させた。フォーラム実施後、町会が川の清掃に協力してくれたり、農業や水利関係者との連携が見えてきたほか、子どもたち自身にも活動への意欲の高まりが見られるようになった。

a26　子ども主体の活動を大人が応援

特定非営利活動法人　みやざき子ども文化センター（宮崎県宮崎市）

⇒地域づくり活動事例４２ ／ P９５

●子どもの視点で一緒にまちをみつめ直してみる

メンバーが小・中学生と一緒に写真を撮りながら中心市街地を歩き、地域の将来を担う子どもたちがまちに抱いている率直な意見をヒアリング。その結果、子どもたち自身が入れる喫茶店が欲しいという要望があがってきた。

●子どもたちが考え、つくるカフェをオープン

そこで、子どもたちの要望をかたちにして、まちなかに子どもたちが運営するカフェを企画した。当初難色を示した近隣商店街へは、メンバーが活動への理解を説いて回った。そして、カフェで販売する菓子の購入や、子どもの接客講習を依頼して快諾されるようになり、現在では商店街側からもカフェ開催の希望が寄せられるほどになっている。

Ｑ３　活動や組織をスムーズに運営するには？

Ａ１　メンバー各自のやる気を引き起こす

a27　事業担当制で競争しながら助成もゲット　…（特）みやざき子ども文化センター
a28　業種・世代・地縁を超えた連携を育む　…安心院町グリーンツーリズム研究会

Ａ２　大学や学生、専門家と連携する

a29　地域外の学生たちの新鮮な視点を活かす　…鞆の浦　海の子
a30　大学の授業でＮＰＯのホームページづくり…（特）浜松ＮＰＯネットワークセンター
a31　地元建築士会から活動のアイデアを得る
…上幟町東・京橋川水辺まちづくり委員会魅力づくり部会
a32　よそ者である“風の人”の視点を活用　…赤岡「まちの宝物ホメ残し隊」

Ａ３　行政と連携する

a33　県とマメに情報交換する　…（特）南会津グリーンストッククラブ
a34　開かれた団体として町役場と良好な関係を維持　…（特）白神山地を守る会
a35　地道に活動を継続し行政からの信頼を得る　…自然と暮しを考える研究会
a36　町と継続的に協働して施設運営を受託　…（特）朝日町エコミュージアム協会
a37　市の期限付きの支援体制で活動スタート　…鶴岡城下町トラスト

Ａ４　他団体や企業と連携する

a38　他の団体との共同イベントで効果を倍増　…村上町屋商人会
a39　地元企業にもメリットあるイベントを共催　…にいがた寺町からの会
a40　企業活動をバックアップして活動資金を捻出
…上幟町東・京橋川水辺まちづくり委員会魅力づくり部会
a41　企業による社会貢献の受け入れをアピール　…つるがしま里山サポートクラブ

●活動資金の確保と節約

Ａ１　メンバー各自のやる気を引き起こす

a27　事業担当制で競争しながら助成もゲット

特定非営利活動法人　みやざき子ども文化センター（宮崎県宮崎市）

⇒地域づくり活動事例42 ／ P95

●組織内部のライバル意識を醸成しつつ、助成金獲得率も楽しく競争

事業担当制を導入し、総会で適任とみなされたメンバーが責任をもって各事業に取り組んでいる。その結果、メンバー間に事業の進捗状況や成果に対するライバル意識を生じさせている。

各事業担当者はインターネットなどで助成金情報を収集し、各自で申請書を作成する。３割獲得を目標に、各担当者はかなりの数の助成プログラムに申請して、その獲得率を内部で競争し合って楽しんでいる。収益事業がない分、資金の確保は深刻な問題ではあるが、ゲーム感覚を活動に取り入れることで、各人のやる気を引き出している。

a28　業種・世代・地縁を超えた連携を育む

安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県安心院町）

⇒地域づくり活動事例54 ／ P110

●「足をひっぱらずに手をひっぱろう」を合言葉に、リーダーが率先して活動推進

ぶどう園の経営者が、従来の生産農業から脱却して農業・農村・田舎だからこそできることに取り組もうと、それまでの農家主体の勉強会を発展させることを決意した。彼は、職業・年齢・性別を超えた連携の必要性を感じ、農家以外の住民を訪ね歩いて説得。多様な人たちの参加が可能になった。

活動は、行政の積極的な支援を得て町ぐるみの活動へと発展、安心院町には商工観交課グリーンツーリズム推進係が設置されることとなった。さらに、これまでの実績が大分県の旅館業法、食品衛生法の運用における規制緩和に結びつき、官民協働による推進体制が全国的に注目を集めるに至っている。リーダーは、さらにバカンス法の導入を国に働きかけるなど、活動を強固にする意欲を失わない。

●多様なメンバーが切磋琢磨する環境をつくる

メンバーには現役高校生もいて、グリーンツーリズムの先進地を訪れる海外研修にも参加している。この経験が、いろいろな人に田植えから餅つきまで米を育てて味わう全てを体験してもらう「マイ米物語」という企画を生んだ。今では彼らがこの企画の中心的役割を担い、世代を超えた連携が育まれている。また業種を超えた連携を意識したことで、安心院の魅力の源泉を農業体験、自然、イベントなど多方面から求めることが可能になった。地元住民のメンバーにとっては、活動に参加したことで、地縁を超えたさまざまな人との出会いのチャンスが容易に得られるようになったことがメリットとしてあげられる。人口減少が進む農山間地域の活動では、門戸を広く開放して多様な人々が関わる環境を整えることが組織を強固にするひとつの方策といえる。

Ａ２　大学や学生、専門家と連携する

a29　地域外の学生たちの新鮮な視点を活かす

鞆の浦　海の子（広島県福山市）

⇒地域づくり活動事例１／Ｐ５２

●大学に出向いて教員や学生に直接アピール

知り合いの大学の先生の講演があり、代表者が東京の大学に出向いたとき、研究室で教員や学生の前で、地域の問題や自分たちの活動のことを熱心に訴えた。それを聞いた都市計画やまちづくりを専攻する学生たちが、何か自分たちで協力できることはないか、と参加してくれることになった。生の声で直接訴えかけることが、効果をあげた。

●学生の新鮮な視点が、地元の大工さんの存在を気づかせてくれた

連続講座・ワークショップ「鞆学校」に参加している学生たちは、地元の大工さんと一緒に街を歩くワークショップを企画した。大工さんは、地元の町家や蔵の造りを熟知しており、実は街の歴史を誰よりもよく知っていることを発見。東京の学生という第三者による新鮮な視点が、地元の人にはなかなか気づかない活動に結びつき、活動の中身を広げることになった。

●サポーターの活動実費を工面して、何度も来てもらえる環境をつくる

東京の学生にとっては、鞆の浦への交通費や宿泊費も経済的な負担。そこで、助成金を申請して旅費を確保し、宿泊は長い間空家になっている家屋の所有者に交渉し、格安で提供してもらった。協力してほしいサポーターには、協力しやすい環境をつくって迎えることも大事なことだ。

a30　大学の授業でＮＰＯのホームページづくり

特定非営利活動法人　浜松ＮＰＯネットワークセンター（静岡県浜松市）

⇒地域づくり活動事例２８／Ｐ８１

●ホームページをつくりたいＮＰＯと大学の知識、技術をマッチング

大学の教員がセミナーやイベントでこの団体を知り、大学の授業で市内のＮＰＯのホームページづくりを行いたいという話から連携が始まった。センターでは、大学の持っている知識、技術と、ホームページをつくりたいＮＰＯのニーズとをうまくマッチングさせたことになる。大学はさまざまな力を持っている。大学の協力が得られれば、アイデア次第で大きな成果が期待できる。

●授業を通して学生たちがＮＰＯの活動に自然に参加

ホームページは、ＮＰＯ自体の活動の実態を知らなければ、つくることはできない。学生たちは、何回もＮＰＯを訪問し、時には一緒に活動することもあった。このホームページプロジェクトによって、学生が授業を通じてＮＰＯ活動に自然に参加する機会をつくることができており、単にホームページを作成する以上の効果が生まれている。

Ａ２　大学や学生、専門家と連携する

a31　地元建築士会から活動のアイデアを得る

上幟町東・京橋川水辺のまちづくり委員会魅力づくり部会（広島県広島市）

⇒地域づくり活動事例２４ ／ Ｐ７７

●活動の悩みを建築士会に相談し、協力を得る

地元住民、地元事業者、関連団体などが集まって活動を開始したものの、なかなか会員相互で共通の理念が持てず、活動は行き詰まった。そこで、専門家の集団である地元建築士会に協力を求めた。まずは、お酒を飲みながら気軽に話をする機会を設け、その後、建築士会の有志が定例会に参加するようになり、助言や協力を得た。こうした中から、出てきたアイデアが、「京橋川の川ばた　未来画コンクール」（小学生対象）と「京橋　川ばた界隈づくり　設計コンペ」（大学生・専門学校生対象）の開催につながった。

●会と建築士会メンバーがそれぞれの人脈や経験を活かして企画づくり

コンクールとコンペの準備期間は１ヶ月半。会と建築士会有志が毎週１回会議して企画を詰めた。企画の原案づくり、審査委員の選定や大学などへの働きかけは建築士会有志が担当し、メンバーの母校を中心に働きかけた。地元小学校への協力依頼は、ＰＴＡ役員である会員が担当し、それぞれの人脈が活かされた。

a32　よそ者である“風の人”の視点を活用

赤岡「まちの宝物ホメ残し隊」（高知県赤岡市）

⇒地域づくり活動事例３ ／ Ｐ５４

●“風の人”と地元の人の双方が楽しみながら活動する

このグループの活動には、都市計画とデザイナーの専門家が、町の魅力と問題をあげるワークショップを企画したり、全体をみるプロデューサー的な存在として関わっている。専門家は「風」のようなよそ者の立場の人間であった方が客観的に判断できるとして、活動と少し距離をおくように意識している。

グループのメンバー側は、専門家のアドバイスは納得できることばかりだが、言われっぱなしにならないよう、メンバー独自のアイデアを考えるなど、双方で前向きに話し合いを進められるように努力している。

●専門家が他の仕事を行うときも赤岡をＰＲ

専門家に関わってもらうことで、頭では分かっているのに言葉にできないことがまとまってきたり、思いがかたちになっていった。また、いろいろなものの見方を教わり、今まで見過ごしてきたものが宝物に見えるようになる。専門家の側では、頭の中に常に赤岡町があり、他の仕事でＣＭを制作する機会があったときに同町をロケ地として選んでくれて、絶好のＰＲになった。

Ａ３　行政と連携する

a33　県とマメに情報交換する

南会津グリーンストッククラブ（福島県南会津郡）

⇒地域づくり活動事例53 ／ P109

●まずは飛び込みで企画を説明し交渉

活動を始めたばかりの頃、グリーンツーリズムの国際シンポジウムを企画したところ、費用がかなりの額になった。そこで、福島県に補助を受けられないかと相談に行くと、すぐに了解をもらえた。グリーンツーリズムを振興させたいという県の方針とうまくマッチしたのである。

●継続的な情報交換が行政担当者との信頼関係を築く

その後、県だけでなく、地元の町の補助金も受けるようになる。なにより大切なのは、責任者および担当者との信頼関係と、素直に意見交換できる環境の醸成。行政主催の会議への参加など、行政からの協力依頼も積極的に受け入れ、担当者が異動するときは後任者に申し送りをしてもらっている。そして、少なくとも月に一度は足を運んで情報交換をするなど、日頃から顔の見える付き合いを大切にしている。地道ではあるが継続した行動が、行政の担当者との信頼関係を築いていった。

a34　開かれた団体として町役場と良好な関係を維持

特定非営利活動法人　白神山地を守る会（青森県鰺ヶ沢町一ツ森地区）

⇒地域づくり活動事例38 ／ P91

●団体の情報を公開することで役場の信用を獲得

会では、中心的な活動である自然保護活動を推進する上で、何でも町と相談してきた。その結果、町と連携してブナの植樹祭を毎年開催することができた。また、町の企画課とは毎月連絡会議を持ち、活動の予定や結果報告などの情報を共有している。クレームを恐れず、開かれた組織を目指して地道に町へアプローチしたことが、信用獲得への道筋をつけている。

●話し合いを通してすべて解決

誤解を招いたり理解が得られなかった時にも、冷静に一つひとつじっくりと説明し、町との間にできた溝を埋めてきた。団体の信用のためにも、何があっても町とは話し合いを通して、すべて解決していこうと決めてきたからだ。焦らずに、目的達成のためには小さなことで争うことなく、常に前向きな気持ちをもつようにしている。

Ａ３　行政と連携する

a35　地道に活動を継続し行政からの信頼を得る

自然と暮らしを考える研究会（佐賀県相知町）

⇒地域づくり活動事例８ ／Ｐ５９

●日頃から行ってきた川辺の環境美化活動で行政からの信頼を得る

気軽に散歩を楽しめる川辺の遊歩道の途中に、道をさえぎる水路があった。そこで水路に架ける橋をつくりたいと考えたが、そこは国や市が管理するところであり、設置許可を得るのは容易ではない。しかし、会では日頃から川辺の草刈や花植えなど環境美化活動を行っていたので、行政からの信頼があり、目的を理解してもらい、比較的短期間で許可を得ることができた。日頃からの地道な活動が功を奏したのである。

a36　町と継続的に協働して施設運営を受託

特定非営利活動法人　朝日町エコミュージアム協会（山形県朝日町）

⇒地域づくり活動事例３１ ／Ｐ８４

●活動実績が評価され行政から施設の運営を受託

会では、「創遊館」内に設置された「エコミュージアムルーム」と「エコミュージアムコーナー」の運営を受託し、活動拠点と専従職員を確保している。地域づくり活動を始めた平成元年当初から、町と協働でエコミュージアムの普及に努めてきたという素地はあるものの、着実に実績をつくってきたことが評価された。このことから、平成12年より法人化して運営を受託することになる。専従職員の給与は、年間240万円の運営委託料から支払われており、専従職員が常駐することで、会報の発行やエコミュージアムの見学受付をスムーズに行うことが可能となっている。

a37　市の期限付きの支援体制で活動スタート

鶴岡城下町トラスト（山形県鶴岡市）

⇒地域づくり活動事例５７ ／Ｐ１１３

●初年度だけ市が事務局を担う

もともと市と連携してスタートした活動であったが、活動の初年度に限定して事務局機能を市が担う体制とした。行政が事務局を担うことは、活動スタート時の起爆剤にはなるが、そのままでは市民の自主性を損ない、行政になんでも依存してしまう恐れがある。こうした考え方から、市による事務局支援体制は期限付きとした。

Ａ４　他団体や企業と連携する

a38　他の団体との共同イベントで効果を倍増

村上町屋商人会（新潟県村上市）

⇒地域づくり活動事例４０ ／Ｐ９３

●出会いのきっかけを逃さずに他団体と連携

町屋60軒で人形を展示し披露するイベント「人形さま巡り」に新潟県巻町で建物保存を行っているメンバーが訪れたことが縁となり、商人会の代表が巻町を訪ねた。ホタルを復活させるという別の取り組みを見るための訪問だったが、古い家を活用して何かしようと県内の複数の団体が企画していることをその時知った。以前から、町屋を使ってコンサートを開きたいと考えていた商人会もこのネットワークに加わり、「古民家ネットワーク」と称して「楽座」を企画、落語などの巡回公演を行った。

●共同開催によりコストと労力の削減

「楽座」は4団体による共同開催としたため、チラシの作成費や公演料・交通費を低く抑えることができた。また、それぞれの団体のネットワークを使って講師を依頼できるため、魅力的な内容の企画が可能となりイベントの効果も上がった。「楽座」の会計では、必要経費は均等に割り、その他は各会場の独立採算とした。

a39　地元企業にもメリットあるイベントを共催

にいがた寺町からの会（新潟県新潟市）

⇒地域づくり活動事例１６ ／Ｐ６７

●まちとともに歩む企業の歴史を紹介

会としては、新潟のまちの歴史を活用したイベントの組み立てには、地元企業の歴史や誇りを含め紹介し、市民活動と地元企業がタイアップしたイベントとして、幅を広げまちを育むような活動を目指している。新潟で初の西洋料理店として始まったホテル「イタリア軒」の歴史を軸に開催したイベント「ニイガタ昭和浪漫」では、ホテルで「昭和の復刻メニュー」を行うとともに、それに合わせて「新潟昭和寺町縁日」というイベントを寺院の境内で開催した。まちとともに歩む地元企業の誇りの復活に向け取り組んでいった。

●活動の当初から企業と協力し、活動の継続性を模索する

市民団体は、地域の魅力を発見するきっかけづくりとしてイベントを行う。そして発見した地域の魅力を活かし輝かせるためには、地元企業の力を借りて継続的な活動としていくことが不可欠である。会では、新潟のシンボル「万代橋」の景観の魅力を発見するため、「ホテルオークラ新潟」と協力し、万代橋の橋詰めでオープンカフェを開催した。オープンカフェの企画は会が主体的に組み立てたが、継続的なオープンカフェを展開するために、地元ホテルにはコーヒー等の飲食関係の準備と販売の協力をしてもらった。イベント当初からホテルに参加してもらうことで、活動を発展させるための課題を共有し、協力関係を築きながら活動の継続性を模索している。

Ａ４　他団体や企業と連携する

a40　企業活動をバックアップして活動資金を捻出

上幟町東・京橋川水辺のまちづくり委員会魅力づくり部会（広島県広島市）

⇒地域づくり活動事例２４／Ｐ７７

●行政のノウハウと人脈を活用して公益活動と企業活動を連携

会は、京橋川の河岸緑地を活用したまちづくり活動を展開している。この河岸緑地に隣接する2軒のホテルが、この緑地を活かした「オープン・カフェ」を計画した。しかし、公共空間での企業活動には制約があった。そこで、会の発案と働きかけにより、オープン・カフェの目的を「地域の公共空間の賑わいの創出」として、その公益性を積極的に示した。カフェ運営の主体は地元住民組織として、これに市や関連する業界団体などが参加するというかたちが、公益性のある活動として認められたのだ。また報道機関に積極的に働きかけ、市民のコンセンサスを得るための努力を行った。

●公益性のある事業を企業に委託し、企業は利益を寄与する仕組み

この事業では、実際にカフェテラスで営業を行っている地元ホテルは、地元住民組織からカフェの運営委託を受けている（委託費は無料）。売り上げから経費を差し引いた利益は、ホテルから実施主体である会に寄付されており、これが会の重要な活動一部となっている。なお、「社会実験」と位置づけているため、開設は夏から秋までの期間限定（夏～秋）となっている。
会の事務局を担当しているのは市の都市計画局都市政策部都市デザイン係。こうした実現のアイデアはここで生まれた。行政のノウハウや人脈がうまく活用された例である。

a41　企業による社会貢献の受け入れをアピール

つるがしま里山サポートクラブ（埼玉県鶴ヶ島市）

⇒地域づくり活動事例３９／Ｐ９２

●ボランティアのように協力できる活動で、企業会員を募る

クラブでは、企業会員である「パイオニア（株）総合研究所」の全面的な協力を得て活動を行っている。パイオニア社内に事務局を置き、社員の一人が勤務時間内に事務作業を行うことができる体制としている。またイベント時には、パイオニアの会議室や設備機器を借り、チラシも企業会員の（株）伸光堂開成の協力で格安の費用で行っている。宣伝効果の高いボランティア活動であること、「環境活動および社会貢献活動の実績づくりのお手伝いをします」という姿勢を積極的にアピールできたことが、企業の協力獲得につながった。企業への説明会は、地域の工業会を通して開催している。

●活動資金の確保と節約

地域づくりに関わる市民団体にとって、活動資金不足は最大の悩みだと思います。このアイデア集では、活動資金確保についての項目を立てませんでしたが、それぞれの項目の中に活動資金確保のアイデアが盛り込まれています。

たとえば、助成財団や行政からの助成金・補助金については「a27」「a33」に、企業・事業者からの支援については「a40」に、行政からの事業受託については「a36」に、自主財源については「a43」にあります。また、活動資金不足を解決するためには、コスト削減の工夫（「a14」「a38」）や活動の場所・機材などの支援を受ける工夫（「a39」「a41」）も有効です。

＊助成財団や行政からの助成金・補助金について

a27：メンバー同士が競争しながら助成金をゲット

a33：町とマメに情報交換しながら補助金を確保

＊企業・事業者からの支援について

a40：地元ホテルが実施するオープン・カフェをサポートして寄付を獲得

＊行政からの事業受託について

a36：町から施設運営を受託

＊自主財源について

a43：イベントのときに特産のメロンを使ったシャーベットを販売

＊コスト削減の工夫

a14：自分たちの手で空き蔵を改修（出費を抑え、愛着も増加）

a38：他の団体と共同でイベントを開催（広告費などを削減）

＊活動の場所・機材などの支援を受ける工夫

a39：地元ホテルにもメリットのあるイベントを開催（会場の提供を受ける）

a41：企業による社会貢献の受け入れをアピール（人材などの提供を受ける）

Ｑ４　普及啓発、ネットワークづくりを行うには？

Ａ１　地域の関心をよぶテーマを見つける

a42 地域の求心力となる“核”を見つける　…水口２１世紀まちづくり委員会
a43 住民にとって愛着のあるものを活用する　…まちづくりグループ「with AIBE」
a44 慣れ親しんだ地域資源を再発掘　…「四国へんろ道文化」世界遺産化の会

Ａ２　イベントで知名度を上げる

a45「赤米」のキーワードで他地域と交流　…ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村
a46 毎年イベントを継続し地域へ浸透　…（特）ＩＫＡＣＨＩ国際舞台芸術祭

Ａ３　ホームページやメールを活用する

a47 ライブな情報をホームページとメールマガジンで発信　…小田原やんべぇ倶楽部
a48 メールマガジンと掲示板でファンを獲得　…くらくらアートプロジェクト実行委員会

Ａ４　マスコミを活用して情報収集・発信

a49 各地にアンテナを広げて情報収集　…阿波農村舞台の会
a50 マスコミを引きつけてイベントをＰＲ　…村上町屋商人会

Ａ１　地域の関心をよぶテーマを見つける

a42　地域の求心力となる“核”を見つける

水口２１世紀まちづくり委員会（滋賀県水口町）

⇒地域づくり活動事例５／Ｐ５６

●地域に縁のある児童文学者に着目

会では、地域のコミュニティ再生の活動の核として、ヴォーリズ建築である「旧水口図書館」（町所有の登録文化財）を再生・活用する活動を始めたようと考えた。とはいえ、同図書館は一般の人には価値ある建物のようには見えず、またヴォーリズの名前も意外と知られていないため、求心力が弱い。そこで、「旧水口図書館」の建つ水口小学校の校歌の作詞者であり、児童文学の分野で大きな実績をあげていた「巌谷小波(いわやさざなみ)」に着目し、活動の第二の核とした。そして、「巌谷小波」をテーマに、その再発見・再評価のシンポジウムを開催した。

●「巌谷小波」をテーマに、住民の関心を呼ぶさまざまなイベントを開催

シンポジウムでは、小波の研究者の講演やパネルディスカッションなどに加え、地元のアマチュア合奏団「さざなみ記念アンサンブル」を招いて参加者と一緒に水口小学校の校歌を歌った。子ども向けには小波原作のアニメーション「こがね丸」の上映会を用意するなど、住民を積極的に参加させるために、複数の角度から仕掛けづくりを行った。

a43　住民にとって愛着のあるものを活用する

まちづくりグループ「with AIBE」（三重県浜島町）

⇒地域づくり活動事例１７／Ｐ６８

●住民が愛着を持っている懐かしい“びん玉”でまちを飾る

“びん玉”とは、以前漁業で使われていたガラス製の浮き玉のこと。浜島町は漁業の町。漁業に関わっている人はもちろん、そうでない人も、子どもの頃から見慣れたびん玉に愛着を持っている。このびん玉を使ってオブジェを製作し、海辺の道路を「びん玉ロード」と名づけて整備する活動を開始した。

びん玉オブジェは、流木の上にびん玉を置いた単純なもの。びん玉には穴が開けられており、毎日夕方に、メンバーが火を点した蝋燭を入れていく。いわば毎日小さなイベントを開催しているのだが、これを繰り返すことによって、住民の関心を引くようになった。

●びん玉ロードを使ってライブ、そこでオリジナル商品を販売

「こんなロマンチックな場所でコンサートしたら最高やな～」というメンバーのつぶやきで、平成14年から、びん玉ロードから臨む浜辺を舞台として手づくりのセッションライブが始まった。浜に特設ステージを設営して、観客席はびん玉ロード。ライブ当日は、特産のメロンを使ったオリジナルのシャーベットの販売も行い、わずかながらも活動資金を生み出すことができた。

Ａ１　地域の関心をよぶテーマを見つける

a44　慣れ親しんだ地域資源を再発掘

「四国へんろ道文化」世界遺産化の会（愛媛県内～四国内）

⇒地域づくり活動事例15 ／ P66

●身近な話題を取り上げ、さらに新たな観点を加えて住民を引きつける

四国八十八ヶ所の札所と遍路道は、四国の住民にとって昔から慣れ親しんだ話題である。会では、この身近な地域資源を活動のテーマに取り上げるとともに、世界遺産登録という目標に向けたフォーラム開催など、地域資源の価値を再認識させる場を住民に提供した。

活動には、「人々の心の触れ合いの場」としての新たな新鮮なイメージを吹き込み、住民に改めて遍路道を考えるインパクトを与えた。「癒し、ボランティア、文化交流、環境保全」という４つのキーワードを用いて、地域資源を肯定的に捉えるきっかけづくりに努めた。日頃から慣れ親しみ、あたりまえになっている地域資源を多角的にとらえ直すことによって、活動テーマを再発掘することができたのだ。

●マスコミ報道を活用する

さらに、会の取り組みがマスコミに取り上げられたことで、四国他県から反響を得るようになった。四国霊場会からの賛同の他、四国四県経済同友会が、各県の知事に遍路道の文化を世界遺産に登録することを提言するなど、ネットワークや活動に広がりがでてきた。

Ａ２　イベントで知名度を上げる

a45　「赤米」のキーワードで他地域と交流

ミニ独立村「赤米のふるさと」千石村（鹿児島県南種子町）

⇒地域づくり活動事例19 ／ P70

●独立村をつくって赤米をＰＲ

全国でも３ヶ所しかない伝統的な赤米の栽培方法が守り継がれている地域のひとつ、南種子町の茎永地区。ここを千石村というひとつの独立村として、赤米を栽培してきた地域のアイデンティティの確立を図った。村の結成には、元中学校教諭が地域文化の継承に光を当てることで、各住民の活動の場を提供したいと考え、自らの人脈を使って広く声をかけた。

●赤米の産地によびかけてサミット開催

同じく赤米を栽培する岡山県総社市及び長崎県厳原町の関係者を千石村に招き、赤米の伝承と豊かな地域社会の創造を目指すサミットを開催した。赤米というキーワードを通じて、それまで交流のなかった地域同士の交流を図り、また日頃島外の人との交流が困難な離島がにぎわったことで地域が盛り上がり、活性化にもつながった。そして、平成14年にはメンバー12名が対馬厳原町豆酘を訪問し、情報交換を行い人的な交流を深めた。

a46　毎年イベントを継続し地域へ浸透

特定非営利活動法人　ＩＫＡＣＨＩ国際舞台芸術祭（山口県柳井市）

⇒地域づくり活動事例62 ／ P118

●元映画館を活動拠点とした地域密着型の芸術祭

廃屋となった元映画館「みどり会館」を修復する過程で、団体のコアメンバー兼地元の劇団員は「みどり会館」の存在価値に気付き、当初稽古場として考えていたこの場所を芸術発信基地、住民のアイデンティティの拠りどころとして活用していくことを決意した。

「伊陸から世界へ　世界からＩＫＡＣＨＩへ」を合言葉に、平成12年から国内外の舞台芸術アーティストや劇団が参加する「ＩＫＡＣＨＩ国際舞台芸術祭」を毎年開催している。プレイベントでは、「地域と演劇祭」をテーマとしたフォーラムの開催やアーティストと観客との距離を縮めるコミュニケーションプログラムを導入し、地域に密着する工夫を行っている。

●地域住民とともにつくり地域活性化に貢献する芸術祭を目指す

地元の他のＮＰＯ団体と連携した地域通貨の運用や、劇場ボランティア制度の導入などにより、住民参加の舞台芸術祭へと発展させてきた。さらに、この地域を芸術村としてシアターツーリズムを確立し観客を広くよび、地域に経済効果があるようなイベントを目指している。住民に主体的に関わってもらえるよう、イベントの魅力向上を心掛けている。

Ａ３　ホームページやメールを活用する

a47　ライブな情報をホームページとメールマガジンで発信

小田原やんべぇ倶楽部（神奈川県小田原市）

⇒地域づくり活動事例１４ ／Ｐ６５

●ビジュアル系（？）のイベントで注目を集める

会の主なプロジェクトには、毎月の歳時記にあわせ、地域のお年寄りや生産者の方々の知恵を借りて、歳時記のしきたりや生活文化を再現するイベント「なりわい歳時記」（１月の「雑煮会」や３月の「雛まつり」など）がある。さらに、活動の拠点である「なりわい交流館」の象徴にふさわしい看板を市民と行政が協働して製作するプロジェクト「看板あげようプロジェクト」があげられる。いずれも、話題性があり、かついわゆる絵になりやすい“ビジュアル系（？）”の活動であり、誰でもイメージしやすく活動ＰＲにも使いやすい。「なりわい歳時記」「看板あげようプロジェクト」といったネーミングも魅力的だ。

●イベント、ホームページ、メールマガジンを連動

会では、発足時からホームページとメールマガジンを活用し、積極的に情報発信を行っている。ホームページでは、写真をふんだんに使い、活動の雰囲気を伝えるようにしている。イベントを開催するときやホームページを更新したときは、会員・非会員の別なく関心を持つ人にメールマガジンを送って、その旨を知らせている。イベント、ホームページ、メールマガジンを有機的に連動させながら活動を展開している。

a48　メールマガジンと掲示板でファンを獲得

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

⇒地域づくり活動事例４ ／Ｐ５５

●参加できなかった人にも情報を発信する

中心メンバーのひとりが、ワークショップやいろいろな活動の後に、メンバーや活動に関わったことのある人へメールマガジン「くらくら日記」を発信している。内容は、蔵の改修に携わっている地元大学生の改修日記や、その日行ったことの感想などが率直な言葉でつづられる。活動に参加できなかった人も、このメールを読んで活動の様子を知ることができ、活動に親しみがわく。

●メール発信が一方通行にならない「意見交換ボード」

さらにこの日記は、発信者が個人用として作成しているホームページ上で「意見交換ボード」として公開されており、意見がある人は返信でき、ホームページ上でやり取りすることが可能となっている。メールとホームページのリンクが面白く、一方通行にならない仕掛けとなっている。

Ａ４　マスコミを活用して情報収集・発信

a49　各地にアンテナを広げて情報収集

阿波農村舞台の会（徳島県）

⇒地域づくり活動事例１８／Ｐ６９

●新聞記者など地域の情報通を仲間に巻き込む

常にアンテナを張って地域情報の把握につとめているのは、新聞記者などのマスコミ関係者である。そのようなメンバーを活動の支持者にして仲間に巻き込むと、ネットワークが格段に広がる。「農村舞台で公演を希望する役者がいる」「徳島市内では約30年ぶりの“仕掛け小屋阿波人形浄瑠璃公演”が行われる」など、情報をキャッチするスピードが早まり、それを活用して活動が展開している。

農村舞台の復活を考える上で、参考となる地域や役者の情報を入手したら、まず現地に出向いて地元グループのメンバーと知り合いになることを心掛けている。まずは会うことが、ネットワーク拡大の第一歩である。

a50　マスコミを引きつけてイベントをＰＲ

村上町屋商人会（新潟県村上市）

⇒地域づくり活動事例４０／Ｐ９３

●時間をかけてパイプ作り、そして直談判

１年がかりでマスコミとのパイプを作り、マスコミ活用作戦を計画した。中でも、東京の某テレビ局に出向き担当デスクに直談判したことが実を結び、「町屋の人形さま巡り」の模様が全国放送された。この日を境に北は北海道、南は九州、全国から大勢の人が押しかけた。こうして、テレビや新聞、ラジオで大々的に紹介され、高い注目を得ることになった。

●マメな活動案内と報告でネットワークを広げる努力

マスコミに積極的にアピールするばかりでなく、「活動自体を話題性が高く実り多いものにしていくことこそが、別の手段に頼らずとも活動のＰＲになる」という心情で、ネットワークを広げる努力も怠らない。マスコミや商工会議所など複数の組織にイベントの後援を依頼しつつ、活動案内をこまめに郵送する。イベントが終了した際には、再び活動報告を行う。また、イベントによって得られた経済効果など活動成果を数値で分かりやすく示すことによって、直接活動に参加していないサポーターの注目を集めることに成功している。

Ｑ５　活動をステップアップしていくには？

Ａ１　長期ビジョンや計画を持つ

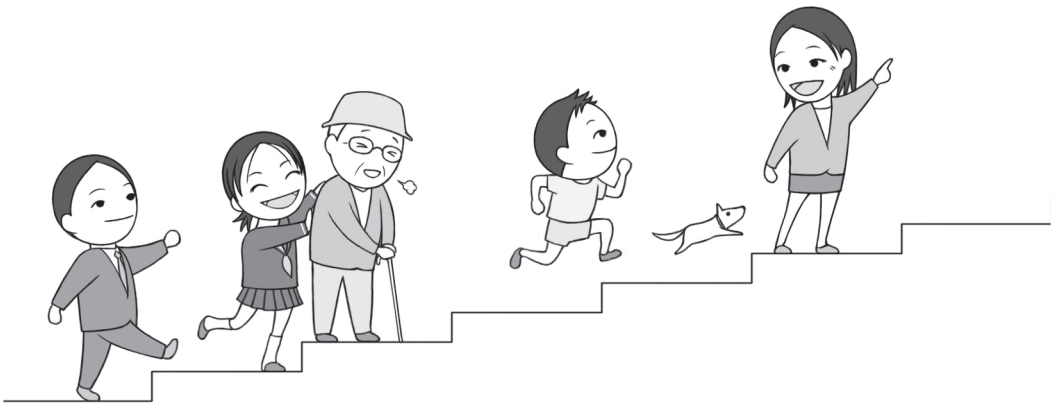
a51　まちの将来像をシナリオとしてまとめる　…くらくらアートプロジェクト実行委員会
a52　目標イメージの共有と次のステージづくり　…安心院町グリーンツーリズム研究会

Ａ２　活動を検証する

a53　活動の区切りごとに懇談の場で振り返る　…くらくらアートプロジェクト実行委員会
a54　地元大学生から客観的な評価を受ける　…（特）朝日町エコミュージアム協会

Ａ３　組織を再編成する

a55　活動の段階に見合った組織づくり　…（特）ＮＰＯ博多まちづくり
a56　ネットワーク拡張型で“点から面の活動”へ　…エコネット津山



Ａ１　長期ビジョンや計画を持つ

a51　まちの将来像をシナリオとしてまとめる

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

⇒地域づくり活動事例４／Ｐ５５

●みんなでまちを調査して将来像を考える

活動を開始した当初、メンバーによってまち観察を徹底的に行った。その成果を元に、地域の資源を地図上にプロットした調査地図を作成し、地区の将来像について意見交換する場を積極的に設けた。こうしてメンバーから出た意見と地域資源を合わせて、まちの目標として「大野町のシナリオ」を作成した。

●シナリオを活かす手段はさまざま

シナリオ作成は、地域プランナーのメンバーが中心となり、職能を活かして行った。シナリオといっても完成されたものではなく、「大野町をこうしていきたい」とみんなで共有する目標を示したものだ。これを具現化する手段として、アートや映像、芝居づくりと、さまざまな方法を取り上げながら活動を進め、あくまで楽しみながら目標に近づいていく達成感を演出している。

a52　目標イメージの共有と次のステージづくり

安心院町グリーンツーリズム研究会（大分県安心院町）

⇒地域づくり活動事例５４／Ｐ１１０

●メンバーのための先進事例見学会を毎年実施

会では、グリーンツーリズムの先進地であるドイツをはじめ、ヨーロッパへ毎年見学に行き、活動の具体的な目標イメージをメンバー各人で共有している。その経験を活かして、グリーンツーリズムについての講演会、実践者との交流を地域で行い、知識・情報を確認すると共に、住民へのフィードバックにも心がけている。

●活動実績が次のステージに結びつく

また、次のステージとして、農業のみならず、文化、福祉、教育、景観などを一体的に考えて活動に取り組むため、この会が中心となって「大分県グリーンツーリズム研究会」を設立した。会のこれまでの実績が効を奏し、行政や県内の他団体を巻き込んで広範な活動を展開していくこととなった。

Ａ２　活動を検証する

a53　活動の区切りごとに懇談の場で振り返る

くらくらアートプロジェクト実行委員会（石川県金沢市）

⇒地域づくり活動事例４ ／Ｐ５５

●ワークショップの後には交流を楽しむ時間を持つ

蔵の改修などいずれのワークショップでも、作業の後には、必ず軽食をつまみながら、他の参加者との交流を楽しむ時間を持っている。“ ワインと軽食 ” のように、打ちとけて話し合える遊び心を大切にした場づくりを心掛け、参加者の声を聞くことで、「進む方向」や「やりたいこと」を参加者が共有し、自分たちの進む方向やスピードを確認している。

●時には「まちづくりフォーラム」などを開催して活動を振り返る

会では、１年間の活動を終了し、これまでの活動を振り返る「まちづくりフォーラム」開催した。先進地からまちづくりリーダーを招いて、カメラを持ってまち探検を行い、ワークショップによるまちづくり活動の効果と今後の課題について討議した。このように、活動の区切りの段階で、外部の人を含めてそれまでの活動を振り返り検証することが、次の新たな展開に結びつく。

a54　地元大学生から客観的な評価を受ける

特定非営利活動法人　朝日町エコミュージアム協会（山形県朝日町）

⇒地域づくり活動事例３１ ／Ｐ８４

●活動をテーマに取りあげた大学生の論文を活かす

山形大学の学生が、この団体の活動を題材に学士論文を執筆した。学生は、１年間メンバーとして参加しながら、会の取り組みを記録し、地元住民の反応なども客観的な視点で書いている。学生には、メンバーと同じように、地元の資源調査をはじめ地元住民との懇親会など、さまざまな企画に参加してもらうことで、活動のより深い部分を見てもらうことができた。

Ａ３　組織を再編成する

a55　活動の段階に見合った組織づくり

特定非営利活動法人　ＮＰＯ博多まちづくり（福岡県福岡市）

⇒地域づくり活動事例２５ ／ P７８

●地区単位のまちづくり協議会から発展

定住者の流出や地域経済の低迷が続く中、昭和 57 年、「このままでは博多がのうなる」という古老のつぶやきをきっかけに、個人ボランティアをベースにした活動が始まった。最初に博多部 4 地区での「まちづくり協議会」設立、その連合体である「博多部まちづくり協議会」設立と、活動の輪を広げていった。衰退が続くという同じ課題を抱えながらも、博多部 4 地区はそれぞれ固有の歴史と文化を持っており、課題解決に向けてなかなか共に活動ができていなかったが、この組織が話し合いの場として機能し始めた。

●全セクターによる対等・協働のまちづくりを実践するための新たな組織づくり

行政や事業者などとの協働も図りながら活動を続けてきたが、ボランティアによる活動は限界となり、「博多部まちづくり協議会」の事務局部分をＮＰＯ法人化。平成 12 年、「ＮＰＯ博多まちづくり」を設立した。地域住民だけでなく、これまで協力してもらった行政や事業者、学識経験者も役員などとして内部に取り込み、全セクターによる対等・協働のまちづくり活動を実践するための組織づくりを図った。活動を立ち上げ、当初からその中心となっていた人が事務局長となり、これまでの成果を活かし、課題を踏まえた活動を展開している。

a56　ネットワーク拡張型で“点から面の活動”へ

エコネット津山（岡山県津山市）

⇒地域づくり活動事例２３ ／ P７６

●同じ市内で活動する団体が次々に連携

平成 11 年津山で「すまいづくり・まちづくりＮＰＯネットワーク」の情報交換会が開催されたのをきっかけに、市内で活動する市民団体が集まり、「エコ」をキーワードにまちの再生を行うエコネット津山を立ち上げた。

さらに平成 15 年には、リユースプラザ津山「くるくる」を拠点に活動していたエコネット津山のメンバーと、津山市環境基本計画策定に携わった市民たちが連携して、活動の幅とネットワークをより広げるために、「エコネットワーク津山」と名前を変えて再スタートした。活動当初は津山市が設置したリユースプラザ「くるくる」の運営をはじめ、各種環境啓発活動、情報交換活動、“まちなか”でのエコをテーマとした再生の取り組みを行ってきたが、活動の範囲を市全体に広げていくために、より幅広いネットワークづくりを常に意識している。

活動を元気にするためのポイント

萩原なつ子（武蔵工業大学　助教授）

『地域づくりアイデア集』のもととなる「地域づくり活動支援調査」プログラムと私との関係は、少し変則的である。どこが変則的かというと平成13年度は選考委員として、2度目は平成14年度の支援対象団体のメンバーとして、そして平成15年度には選考委員として再び関わることになったからである。短期間に支援対象を選考する側とされる側という異なった立場を経験できる機会はめったにあることではない。

選考委員として「地域づくり」を支援するプログラムに関わることの面白さは、限られた範囲ではあるけれど、日本各地の市民活動の傾向を把握できることにある。申請書に目を通すことによって、現在、地域がどのような課題を抱えているのか、そしてその課題を住民・市民がどのような方法で解決しようとしているのか、また、どのような面白い試みがなされているのか、あるいは行おうとしているのかを知ることができる。

申請書を読んでいると「ここに行ってみたい」「この人たちに会ってみたい」という案件にあたることがある。これは私が選考の際に大事にしているポイントのひとつである。そして支援対象団体を実際に訪ねる現地インタビューでは、申請書からだけではわからない地域の特性ーたとえば食文化や生活文化、自然環境、まちの表情などーや実際に活動している人々の目の輝きや意気込みを直に感ずることができるという楽しみがある。予想外に活動が展開していたり、おいしいものに出会ったりするとワクワクしてくる。

「地域づくりアイデア集」を手にとり、パラパラめくっていれば、きっと読み手に語りかけてくる活動にあたるはずだ。そのときは、ぜひ現地に行くことをお勧めしたい。その際、自分たちと同じような活動をしている団体を訪ねることはもちろん有意義だが、異なった課題に取り組んでいるところ、手法がおもしろいところ、地域性の異なるところを選んでほしいと思う。異文化交流ならぬ、異活動交流、異地域交流、異分野交流、異人間交流を、アイデア集を活用して積極的に行っていただきたい。

さて、本プログラムの支援対象となり、私もメンバーの一人として関わっている活動は、里山保全活動を目的に宮城県松島町で旗揚げした「日本三景松島芭蕉の里づくり交流会たけのこ炭の子クラブ」である（事例33）。活動の中心を担っているのは長い間、環境行政に携わってきている行政職員である。私は2年間、宮城県環境生活部次長としてＮＰＯ活動促進行政にも携わっていた。職員との会話を通して、実は何か市民活動をしたいという思いを持っている人が少なくないことがわかった。そこで機会あるごとに、どんな事に関心があるのか、何をやってみたいのかなど聞いているうちに絞られたのが「里山保全活動」だったのである。松島で伝統的な生活スタイルを保持しながら暮らしている家族と接点がある職員がいたことから、その関係を糸口に団体を設立したのである。支援対象となったことでメンバーの意気込みにも弾みがつき、今年設立3年目だが活動の拠点はもはや松島にとどまらない。歩みはカメのごとくではあるが、少しずつ里山保全という目標に向かって活動を積み重ねている。

ところで、たとえ助成対象にはならなくても、様々な助成プログラムに申請をし、自分たちの活動内容を担当者に知らせることはＮＰＯの役割のひとつであると思う。なぜならばＮＰＯの身上は、先駆性にあるからだ。つまり、申請時の応募要綱にはあてはまらないけれど、選考委員や担当者に新しい課題が発生していること、新しい動きが地域で始まっていることを知らせることは大事だからだ。そこから新しいプログラムが生まれるかもしれない。また、ＮＰＯにとって申請書を書くという作業は自分たちの活動が何を目指しているのか、何をしようとしているのかをメンバー同士で議論し、明確にする絶好の機会となる。そのような意味からいっても、「地域づくり活動支援調査」のようなプログラムの存在は大変重要なのである。